

鉄砲洲神社 論語素読 解説

(平成22年5月14日)

公冶長第五

4 ある いわ よう じん ねい しいわ いづく ねい もち ひと あた
或ひと曰く、雍や仁なれども佞ならずと。子曰く、焉んぞ佞を用いん。人に禦る
こうきゆう もつ しばしばひと にく じん し いづく ねい もち
に口給を以てすれば、屢人に憎まる。その仁を知らず、焉んぞ佞を用いんと。

或る人が孔子に言うには、「雍（仲弓）は仁者だと思うけれども、口があまり達者ではないですね」

孔子が答えて曰く、「どうして口達者な人間を用いなければならないのか。人に対応させるのに、口がよく回る人間を以てした場合は、たびたび人から憎まれるものだ。そういう人間は当然、仁は分からない。どうして口達者な人間を用いるものかね」

聞いている時は非常に口達者だけれども、後で人さまから恨まれたり、不信をかったりするものだ。そういうことを考えれば、人を採用して使おうと思う時には、口が良く回る人間は危ないからやめた方が良く。なるべく口の重い人間が良いということです。

鳩山さんは結構口達者ですね。次から次に頭が回ってその場限りの言葉を言うから、その場はふーんと思っても、少し考えてみると、言っている事とやっている事が違うし、前に言っている事と今日言っている事が違うではないかと思えます。

鳩山さんから遠い人たちは皆さん口が重いから、今のところはそういう人が良さそうなのかなと感じます。自民党にしても他の党にしても口達者で攻撃していますので、どうも政治家の人たちは佞（口達者）にあたるなと感じます。

5 し しっちょうかい つか こた いわ われ こ こ いま しん あた
5 子漆離開をして仕えしめんとす。対えて曰く、吾斯れを之れ未だ信ずること能
し よろこ
わずと。子説ぶ。

漆離開は孔子より12歳若い弟子です。その漆離開をそろそろ世に出してやろうと思って、「もうそろそろどこかの国で、しかるべき地位に就いたら良い頃になった。心当たりに推薦をしてあげるが、どうだい」と言いました。

漆離開が、「私はまだ自信が湧いてきません。自信がない状態でどこかの国に仕えたなら、先生の顔に泥を塗ることになる。もう少し先生の下で勉強させてください」と答えたので、孔子が悦んだ。

今、こういう会話をする師匠と弟子は、まずいないのではないのでしょうか。弟子は先生を押しつけて世に出ようとするし、先生は弟子が力をつけてきても世に出るのを止めてしまふような時代なので、こういう師匠と弟子の間柄は悪くないと感じます。

6 子曰く、道行われずんば、桴に乗りて海に浮ばん。我に従わん者は、其れ由かと。子路之を聞いて喜ぶ。子曰く、由や勇を好むこと我に過ぎたり。取り材る所無からんと。

孔子が言うには、「どこの国も私を採用してくれないなら、船を作って、自分の理想を受け入れてくれるよその国に行こうではないか。」

中国の思想では、中華が真ん中であって、外国は野蛮人の国という感覚です。野蛮人の国の方が、かえって私を受け入れてくれるかもしれないということを頭において、孔子はこういう科白を言っているようです。

「その時に、自分と一緒に来るものは子路一人かね」と孔子が言ったので、子路は先生から信頼されていると喜んだわけです。それを見て孔子が子路を諷めて、「子路は勇氣は私以上にあるけれども、知恵が無い。船を調達してくる知恵を持ち合わせてはいないねえ」と水を浴びせています。

どこの組織でも、例えばトップが失意で、今やっている仕事を放り出してどこかへ行こうとする時に、なかなか付いて来る者はいないでしょう。泥舟に乗って一緒に沈もうという人はいないでしょうし、よその国に逐電しようとする時に付いて来る者はいないと思います。

時の首相が逃げ出そうとする時に、我も我もと一緒に逃げ出す人間は多いけれども、徳に打たれて共に行動するようなことは日本国民にはないだろうな、とこの文章から思いました。明治維新では玉（ぎょく：天皇陛下）を担いだ方が勝ちだということで、薩長は玉を握ることに血道を上げ、幕府の方は玉を取られたので打つ手がなくなったという経緯があります。日本人にとって心の奥底に天皇陛下の存在は相当大きなものがあると思いますが、それが今現在どこまで通用するのかとこの文章で連想致しました。

以上で本日の論語の解説は終了です。